



千葉 亀雄  
(美里町近代文学館提供)

めていききました。

千葉亀雄は、父の実家がある不動堂村（現在の美里町）で幼少期を過ごしました。父を早くに亡くしていたので、母が一人で農業や裁縫をして、苦しい生活を支えていました。読書が趣味だった母や学問好きで教師をしていた父の影響もあって、亀雄は読書が好きになっていききました。貧しかった亀雄は、小学校の校長先生や地域のお寺の住職に学んだり、本をたくさん持っている人の家を訪れては毎日のように本を読んだりして、知識を深

明治二十四（一八九一）年、十三歳になった亀雄は、仙台に出て印刷屋で働き始めました。仕事の内容は原稿の配達や受け取りでした。亀雄は原稿が出来上がるのを待つ時間に、活版印刷の文字並べを手伝っていました。周りの同年代の子どもにはとても読めない難しい字をすらすらと読み、そこにいた大人たちを驚かせました。それが、新聞社「仙台新報」の社長、鈴木太郎作の耳にも入り、優れた才能を買われた亀雄は鈴木家に迎えられました。鈴木の家には亀雄の読書欲を満たすのに充分なほどたくさんの本があり、亀雄は少しの時間があれば、夢中になって読書ばかりしていました。一時は、宮城県尋常中学校（現在の仙台一高）に通わせてもらっていましたが、鈴木の仕事の都合で飯野川村（現在の石巻市）に引越すことになり、亀雄も学校をやめて一緒に行くことになりました。しかし、どこへ行こうとも亀雄の読書熱が冷めることはなく、すぐにその地域の文学青年を人づてに探し出し、そこに通いつめて本を借りては読むという生活を続けました。

幼いころからたくさんの本を読み続けてきた亀雄は、将来、文学の道に進みたいという思いを強くしていま

した。鈴木はそんな亀雄の才能を認めつつも、（文学を仕事にして生きることは難しい。優れた力を何かの仕事に生かすことはできないか。）と考えていました。そこで、鈴木は亀雄を呼び、次のように話しました。

「亀雄、私はいざれ銀行を経営したいと思っています。それをお前にも手伝わってもらいたいのだが。」

「えっ、銀行ですか。私は銀行経営に関わることはあまりよく分かりませんが……。」

「それは分かっている。だから、お前には仙台の私の親せきの家から銀行経営について学べる学校へ通ってもらおうと思っている。どうだ。」

「……。」  
「お前は本を読むことが好きで、文学の道に進みたいと思っているだろうが、そんなにあまい世界ではない。」

「……。」  
「どうだ、亀雄。」

「……。」  
「はい、分かりました……。」

亀雄は言われたとおり仙台の学校へ通うことにしました。その学校への登校初日、亀雄はずっとうかない顔をしていました。授業中も先生が話す言葉は全く頭に入ってきません。翌日から、亀雄の姿はその学校にはありませんでした。亀雄は学校へ行くふりをして、図書館に通い本を読んでいたのです。数か月後、ついにその事実が鈴木たちに知られてしまいました。そのとき亀雄は心からの謝罪をしながらも、このときとばかりに自分の思いを熱く語りました。

「私は文学の道で身を立てたいのです。今までお世話になったみなさんを裏切るのはとても心苦しかったので



活版印刷：  
金属や木に文字を彫り込み、それを並べたものに塗料をつけて印刷すること。

すが、もう仙台にいても私には開くべき道がありません。どうか私を東京に行かせてください。必ずその道で身を立て、みなさんからいただいた恩に報います。」

普段はおとなしい亀雄の必死な様子に鈴木たちも心を動かされ、亀雄が東京へ行くことを認めたのでした。

東京に出た亀雄は新聞配達や牛乳配達の仕事をしなが、読書や執筆活動に力を入れました。それから三年後、雑誌社の記者として採用されたのを手始めに、二十代の後半には新聞社に勤め、ジャーナリストとして幅広く活躍するまでになったのです。

幼いころからの読書で身につけた広い知識と豊かな感性を武器に、読者の求める新しい紙面作りを心がけました。特に四十歳を過ぎてから勤めた「読売新聞」では、社会部長兼文芸部長という大変重要な役割を任せられました。

そのとき、亀雄は有名作家の作品ばかり載せていた新聞の文芸欄に、無名の作家でもよいと思った作品を掲載するという今までになかった試みをしたのです。このことは多くの新人作家に夢をもたせ、文学界に新風を吹きこんだ一方で、一部の有名作家や文学者には反感を抱かせました。ある大学教授は次のように亀雄に迫りました。

「どうしてきみのところの新聞は、無名の作家の作品を載せるのだ。文芸欄の歴史をおとしいている。」

「あなたは新聞に載せた作品をすべて読んだのですか。」

「いや、読まんよ。無名の作家の作品なんて読む気にならん。有名作家の作品を載せれば読もう。」

亀雄はそれに勢いよく反論しました。



身を立てる…  
その仕事によって生活する。

ジャーナリスト…  
新聞・雑誌などの記者、編集者。

文芸…  
詩や小説など、言語表現による芸術・文学。

おとしめる…  
おとつたものとして見くたすこと。

「あなたは有名な作家しかよい作品を書けないと言っているのですか。作品の良し悪しは、作家が有名か無名かでは決まらないはずですよ。」

このような批判を受けたり、新聞への執筆を断られたりしても、亀雄は一切その方針を変えませんでした。その後もさらに新人作家の発掘に力を入れ、その結果、多くの若い作家が亀雄によって文学の世界へ送り出され、作家として歩み始めることになったのです。この亀雄の功績が、相当高い教養を必要とし、一部の人のためのものでしかなかったその当時の日本文学を、広く多くの人に読まれるものへと変えることにもつながりました。

亀雄の死後、亀雄によって育てられ世に送り出された若い作家たちは自分たちが書いた作品の売り上げて、亀雄の功績をたたえる石碑を建てました。そこには「文学を愛し、真心のこもった行いをする」という亀雄の生き様を象徴する『好學篤行』という言葉が刻まれています。多くの人々に優れた文学を提供し、文学の大衆化に貢献した亀雄の生涯を美里町の近代文学館で見ることが出来ます。あなたも近代文学館を訪れて、千葉亀雄の功績にふれてみませんか。



千葉亀雄記念文学室 (美里町近代文学館)

### 千葉 亀雄

千葉 亀雄は、明治十一（一八七八）年、山形県酒田町（現在の酒田市）に生まれた。ジャーナリストとして雑誌「文庫」の記者から出発し、日本、国民、時事、読売、大阪毎日、東京日日の各新聞社の主要ポストを務めながら、社会欄の開拓、文学や児童・婦人問題についての評論、海外文学の紹介、そして、新人作家の発掘・育成に力をつくした。また、文芸評論家としては、横光利一、川端康成らの文学の傾向を敏感にとらえ、「新感覚派」と名づけたことでも有名である。

功績…  
世の中のためになる、すぐれた働き。

大衆化…  
社会の大部分をしめる多くの人々に広がること。